



# 統合失調症を患う母とともに生きる子ども

## ～ゆりの日常～

お弁当 ー14歳ー



### 松岡園子

3学期は短い。2月に入り、春休みまでの日数を数えだすと、残り少なさがより一層感じられるようになってきた。先生達も「もうすぐ2年になるんやから……」と話すことが増えた。

「2年では同じクラスになれたらいいな」

林さんは握ったカイロを上下に振った。朝8時。麦の穂が描かれた看板が見えてくる。

「うん、そうなたらいいなあ。今日もワールド、寄って行くね」

ゆりが自動ドアの前に立つと、温かく甘い香りが胸まで入り込んできた。

「あっ、新商品やっ。バレンタインが近いから？」

林さんの視線の先には5色のチョコスプレーで覆われた、手のひらほどのパンが並んでいる。ゆりはそのパンとサンドイッチ、野菜ジュースの紙パックをトレーに載せた。

祖母が亡くなってから9か月が過ぎた。独り言をつぶやき、家事もできなくなった母・夏子と神戸で二人暮らすことに、周囲は反対した。しかし、夏子と離れ、児童養護施設で暮らすことには納得がいかなかった。神戸の家に夏子と帰ってきたが、住む場所がなかなか定まらないことや夏子の入院など、それまでに経験したことのない出来事が次々と起きた。そのたびに、祖母の友人や近所の人、友達が支えてくれた。そうして9か月間やってくることもできたが、夏子は退院した昨年の秋ごろから一日中、家で寝ていることが多い。

それでも、中学1年生でもあるゆりの生活は止まることなく続いていく。毎日の食事の用意や洗濯、学校の勉強も待つてはくれない。

4時間目の終わりを知らせるチャイムが鳴った。ゆりはカバンの中からワールドの袋を取り出そうと手を伸ばした。パン2個と飲み物を1本買うために、1日で400円ほどかかる。月曜から金曜まで一週間で2000円、一か月で8000円ほどかかっている。

「ゆりちゃん、あんな、うちのお母さんが、お弁当作るからそれ持って行ってあげ、って。」

水曜日だけやけど。だから明日はパン持って来んでええよ」

同じ班の板谷さんが言った。

「え、お弁当……いいの？」

板谷さんとは同じ班になるまで、特に親しいというわけではなかった。それなのに、と躊躇する気持ちがあった。

「うん。ゆりちゃんのことをお母さんに話したら、そう言ってた」

板谷さんは、眉の上で真っ直ぐに切り揃えられた前髪を揺らして微笑んだ。

次の日、4時間目が終わると、板谷さんがカバンから黄色いギンガムチェックの包みを取り出した。しっかりとアイロンがけのされているナフキンの結び目からも、愛情が伝わってくるような気がした。お弁当箱やお箸まで自分のために用意してもらうのは初めてだった。

お弁当箱の蓋をゆっくりと開けた。ゆりの予想とは違い、赤や黄色、緑が目飛び込んできた。これまで他の人のお弁当を細かい部分まで見たことがない。カラフルな色は、おかずを適当に詰めただけでは出すことのできない色合いだと感じた。自分のためにご飯を握り、おかずの色合いを考えて詰めてくれた人がいることに、胸のあたりがじんとあたたかく、膨らんでいくような気がした。

玉子焼きをかじると、甘さが広がる。ゆりがそれまでに食べたことのある玉子焼きの中で、一番優しい甘さだった。

「板谷さんの家の玉子焼きって……甘いんや」

思わず、声もれた。

「えっ、ゆりちゃん家は甘くないん？」

「うん、またちょっと違う味」

見た目は同じ玉子焼きでも、味が違う。祖母がよく作ってくれた醤油風味の香ばしさが口の中に広がることを想像していたゆりは、喉の奥に残るお菓子のような香りをかみしめた。

板谷さんのお母さんはこのお弁当を、どう思って作ってくれたんだろう。可哀想な子だと思って作ってくれたんだろうか。ゆりは、帰りに板谷さんの家に寄ることにした。

板谷さんの家は、ゆりの通学路とは別方向にあった。中学校を出て坂道を下りしばらく行くと、道路の左右が団地に挟まれた景色に変わった。板谷さんが「あそこの15棟」と指さした。

「おかえりい」

15棟と書かれた案内板の前で小学生ぐらいの女の子と男の子が声をかけてきた。「妹と弟」と板谷さんは照れくさそうに言った。板谷さんの後に続いて一緒に階段を上ると、右側のドアに手作りのような木製の表札がかかっている。ドアが開くと、焼き魚の匂いにふわっと包まれた。レースの暖簾の向こうから板谷さんのお母さんらしき人がエプロンを外しながら現れた。

「今日はお弁当、ありがとうございます。あの……洗ってなくてすみません」

自分が食べた後のお弁当箱を洗ってもらうなんて、恥ずかしいような気がした。

「お礼なんかいいよー。水曜日だけやけどね。無理な時は前もって言うからね」

板谷さんのお母さんは何も気にしていない様子で、ナフキンに包まれたお弁当箱 2 つを両手に持って揺らした。やっぱり「お母さん、ってこういう感じなんだな、と思った。夏子は今、家で寝ていることが多い。でも、つじつまの合わない話や独り言は減り、少し話ができるようになってきた。話ができるようになってきても全てができるようになるわけではなく、ゆりにも友達のことにも無関心で、誰かに何かをしてあげるといった気持ちを持つのは難しそうだ。

「お口に合ったかな？ どの家にも「うちの味、って、あるからね」

「えっと、玉子焼きが初めての味で……」

「甘かった？ それが、うちの味。ゆりちゃんの家も味もあるよね。どっちが良いとかじゃなくて、その「うちの味、っていうのでいいよ。その味は、他の家のものを味わってみないと気付けないものやから、良い機会やったね」

そう言って板谷さんのお母さんは丸い瞳で笑った。うちの味って他に何があるやろう、と考えた。おかずの味だけじゃなく、他にも「うちの味、がありそうだった。考えながら夏子の顔が浮かんだ。

残りの 3 学期、春休みもあつという間に過ぎ 2 年生になった。林さんとは違うクラスだった。

「8 クラスもあるんやから、ま、しょうがないなっ」

配られたクラス分けのプリントを見ながら北校舎の 2 階に上がった。

「私は 3 組やから、こっちやね。また帰りにね」

階段の踊り場で林さんと左右に別れた。2—6 のプレートを目指して歩く。

ゆりが教室に入ると、後ろから誰かが肩をたたいた。

「ゆーり」

奈央ちゃんだった。整髪剤ですだれのように根元を固めた前髪が前よりも一層、高さを増したような気がする。

「一緒のクラスやね」

「うん、よろしくね」

皆、新しいクラスになって落ち着かないのか、先生がまだ来ていない教室の中は話し声でいっぱいだった。

「奈央ー、同じクラスやん！」

声のした方を振り向くと、知らない女子が奈央の腕をつかみ、勢いよく引っ張っていった。その二人の後ろ姿を見ながら、ゆりは 1 年生の時とは違う雰囲気を感じた。2 年生になったからなのか、微かな変化に自分が気付いていなかっただけなのか。

一部の女子は、1年生の時にはひざ下丈だったスカートの長さも、ひざが見える位まで短くなっている。奈央もその一人だ。背が伸びたからではなく、スカートのウエスト部分を何回も巻き上げて、短くしているのだ。靴下も、よく見ないと履いているとはわからないほど短くなっている。そうすることで、足首がきゅっと締まって見える。ヘアアクセサリも黒のヘアピン以外は禁止だけれど、2本のピンをクロスさせて留めると、あか抜けて見える。規則通りの服装をしている子と、そうでない子が1つの教室の中にいる。全体を見渡すと、服装や髪形にアレンジを加えている子は、おしゃれでスタイルよく見えるような気がする。

クラス替えがあつてすぐに、奈央と同じ班になったことから親しく話すようになった。流行りのドラマや曲の話題、駅前の雑貨屋の情報など、話していると世界が広がっていくようだった。

「こんにちはー」

休み時間、ゆりの横にいる奈央に向かって1年生の女子2人が声を張り上げた。奈央は何も言わずに微笑み、手を振った。

運動部では先輩に校内や通学路で会った時に挨拶をするきまりが特に厳しいらしい。先輩を見た瞬間、廊下の隅に寄って頭を下げる。そこに笑顔はない。挨拶をしなければ、何か大変なことにでもなるのだろうか。先輩ってそんなに偉いものなんだろうか。

ゆりは子ども会で自分がピアノの弾き方を教えている、小学生の子どもたちを思い浮かべた。自分が先に学んだことを、年下の子たちに教えていく。ただそれだけの関係に、笑顔も出てこないほどの緊張感が必要なんだろうか。部活の先輩、後輩の関係って厳しいんだなと思った。

5月、奈央に数学のノートを貸した。

「今日、部活が終わったら、家にノート返しに行くね」

奈央はそう言って部活へ向かっていった。その日、奈央がノートを返しに寄り、ついでに家に上がってお菓子を食べた頃から、それまでとは違うことが起こり始めていた。

「今日、帰りに寄るから」

6時間目が終わり、ホームルームの時間になると、奈央はそう言うことが多くなった。いつもゆりの返事はイエスであると決まりきっているように、部活に行ってしまう。

「奈央ちゃんって、ちょっと怖くない？」

月、火、水と奈央が家に寄ることが続いた明るく日の木曜日、校舎を出て林さんと二人になったところで、おそろおそろ切り出した。

「うーん、気が強いところはあるなあ。小学校の時から奈央ちゃんは怖いよ。でも、何かされるっていうわけでもないし。私たちの言う“怖い”って……何なんやろうね」

ゆりは林さんの言葉を聞いて考え込んだ。怖いて、何が怖いんやろう。友達が怖いという気持ちは、事件の犯人を怖いと思うようなものとは違う。

「そういえば小学校の時、命令したり、思い通りにならなかったらほっぺを膨らませて怒

ってたよね」

その怒っている様子が怖いのもかもしれない。いや、それとも少し違う。違うけど、それが何なのかがわからない。会って話している時は楽しいし、怖いなんて感じないんだけど。

夕方、玄関のチャイムが鳴った。時計を見ると6時を過ぎたところだった。

「はい」

玄関の小窓から覗く。

「入るよ」

そう言いながら、すでに奈央は門を開けて入りかけている。ゆりは自分の家だけでなく、心の中にも当たり前のように入ってこられるような気がして恐ろしくなった。玄関のドアが開く。奈央ちゃんは短いスカートを揺らしながら、すぐ2階に続く階段を上り始める。自分の家のように階段を上っていく。奈央が家に上がっていることを、夏子は気づいているのだろうか。一階はしんとしたままだ。奈央が来て一緒にテレビを見たり、買い物に出かけることが多くなった。

奈央の望みは、次第にエスカレートしてきているような気がした。授業が終わり、部活に向かうまでに注文が入る。

「今日寄るから、アイス買ってきといてね。それと『りぼん』の発売日やから、それも」

奈央ちゃんは、私のことを何だと思っているんだろう。ゆりは都合のよい使い走りみたいで、情けなくなった。

「ただいまあ」

ゆりが玄関のドアを開けると、夏子の声が奥の部屋から聞こえてきた。玄関の床には、パンフレットらしきものが置かれている。

「お母ちゃん？」

パンフレットにクリップで留められた紙には「請求書」と書かれている。

「これなに？」

請求されている金額は15万円だった。心臓がどきん、どきんと大きく震える。喉の奥で息が止まる。項目のところには「屋根補修」とだけ書かれている。請求書を一枚めくると同じ金額で「領収書」と書かれた紙が出てきた。

もしかして、これ払ったの？ この前見た通帳の貯金は、確か60万円台だったはず。頭の中に、60マイナス15と計算式が浮かんだ。屋根の補修なんて、今やっている場合ではない。

「お母ちゃん、これ払ったん？」

奥の部屋で横になっている夏子に訊いた。

「うん。今日ね、業者さんが訪ねてきてね」

「何て言ってたの？」

思わず声が大きくなる。

「近所で壁の補修工事をしてたら、うちの屋根の状態が悪いのが見えて……って」

「で？」

まさか、すぐに払ったとか。背中が汗ばんでくる。業者さんとのやり取りがゆりの目の前で再現されるようだった。今の夏子なら、すぐに払うだろう。

「雨漏りしないためにもすぐに工事が必要って言って、屋根に上ってくれて」

で、払っちゃったのか。口の中が乾いてカサカサする。声が出にくい。

「そなん、今、雨漏りしてないし。屋根なんて見えへんやん。状態が悪いかどうかは、自分でも見てみなわからんやん。ちゃんと説明してもらったん？」

言いながら、あ、無理やと思った。夏子には無理だ。業者さんだって、話しながらわかったはずだ。夏子に判断が難しいということも。

「家族で相談してからにしてとか、言わなかったん？」

領収書の数字を見ていると、次第に腹が立ってきた。

「娘と2人暮らして言ったよ」

「何でそんなこと、初めて会った人に言うん！」

女2人で暮らしているなんて、自分たちの弱みをつかまれるような気がして、初めて会う人に言って欲しくはなかった。

ゆりは玄関に戻り、しばらく立ちつくしていた。自分で屋根を確認しようという気力も沸いてこない。夏子には判断が難しいのに、うまく言いくるめて代金を払わせるのは、ずるい。

ゆりは下駄箱を開けた。祖父の靴が3足入ったままだ。3年前に亡くなってからも、そのまま下駄箱にしまってあったものだ。この家に男の人がいないから、なめられるんや。下駄箱から取り出した紳士ものの靴を玄関に全部並べた。

「この家には、おじいちゃんが居るんや。だから、大事なことはおじいちゃんに訊いてからでないと、決められないんや」

そうでないと、この家のお金がなくなってしまう。

ゆりは埃をかぶった祖父の靴を力を込めて磨いた。ゆりのいない間に業者さんが来て何かを決めようとする時は、「父と相談する」と言って一旦、帰ってもらうよう、夏子に頼んだ。台所のホワイトボードにも『父と相談する』と大きく書いた。

夏休み期間の8月、駅前に「CD レンタルショップ・うさぎ堂」がオープンした。ゆりは看板を見ながら「オープンしなくていいのに」と思っていた。奈央は、関心のあるものを見つけるのが早い。

今までその道を通らないようにしていたのに、いつもの表通りが工事中だった。そのため、本屋さんに向かっていたゆりと奈央は、まわり道をしなければいけなかった。歩きながら「しまった」とゆりは思った。ここは、あのお店がある道だ。ビルの一階部分に「CD レンタル・うさぎ堂」と装飾されたガラスの扉が見えてきた。

「あ、新しくできたんやあ。行ってみよ」

やっぱり奈央は気づいた。

扉を開けると、2階へつながる階段が伸びていた。流行りの曲が耳に飛び込んでくる。

「へえ、結構せまいなあ」

奈央はどんどん階段を上っていく。

階段を上りきると CD シングルはその階にあり、「アルバムは3階」と張り紙がされていた。

店員のお姉さんと目が合った。

「初めてですか？ 中学生？ 高校生？」

「中学生です」

「だったらまずね、レンタルするには会員証を作ってもらわないといけないの。保険証とか、住所のわかるものが要るんだけど。今日、持っているかな？」

「持ってません」

よかった。このまま諦めて忘れてくれたらいいのに、と思った。

「じゃあ、また持ってきてくれたら手続きするから、それからね」

ゆりは軽く頭を下げた。ほっとして、後ろにいた奈央の方に体の向きを変える。奈央は、CD から目を離さずに低い声で「行こ」と呟く。階段を下り、外へ出た。

「保険証があったらいいんやろ。この間、歯医者に行く時、持ってたやん」

結局、家まで保険証を取りに行き、CD を借りることになった。

「わあ、これ、聴きたかったやつ」

もう一度うさぎ堂に戻ると、奈央はもう CD しか見えていないようだった。ゆりは、何も言わずに奈央を見ていた。こんなに魅力的な空間にいと、奈央の欲望は際限なく広がっていきそうな気がした。

「次、3階行こ」

品物を入れるカゴには5枚ほどシングルが入っている。

「ゆりも、聴きたい曲ないん？」

あるよ、と言いかけて口をつぐんだ。

「うん……今はない」

聴きたい曲はあった。でも、そんなことをしたらレンタル代金が増えるだけだ。

2階に下り、カウンターで会員証を発行してもらった。代金を払う段になると、「払って」と奈央が言う。なんで奈央ちゃんの買い物なのに私が払うの、と心の中では叫んでいるのに、声にできない。ゆりは、奈央の満足そうな横顔を見ながら、心がひりひりと痛んだ。

それから週に3回ほどのペースで玄関のチャイムが鳴る。ここのところ頻繁に、奈央が家に来る。

「早く帰らんでも、大丈夫なん？」

時計は7時をまわっている。晩御飯の時間じゃないのかな。うちに来てテレビを見たり、お菓子を食べてゆっくりしている奈央の家のことが気になってきた。

「ん？ 大丈夫」

奈央のお母さんは、ゆりの家に寄っていることは知っているだろう。でも、帰りが遅くなったとしても電話ひとつかかってこない。

昨日、奈央と駅前のスーパーへ服を買いに行った。

「私が選んであげる」

そう言いながら奈央が選んでくれた服は、デニムのノースリーブシャツと白いスカートだった。奈央に言われるままに試着をしてみると、格好よく見えた。試着室から出てきたゆりを迎えたのは、カゴに入った奈央の服だった。

「これも一緒に払って」ゆりは、奈央がこの洋服を家に持って帰ったら、お母さんに叱られるのではないかと思った。買ってあげた覚えのない服を自分の子供が着ていたら、おかしいと思うだろう。「何しているの。そんなことやめなさい」そう言ってやめさせるだろう。

ゆりは期待した。

しかし、待っても待っても「その時」は訪れなかった。

奈央の要求を断るのが怖い。それに従わないと、どうなるんだろう。仲間外れにされるのかな。学校での居場所がなくなるのが怖い。だけど、今、ゆりがしていることは色々な人を裏切っている。今までお世話になった人たちはどんなに失望するだろう。そんなことしたくない。

ゆりが高熱を出した時に病院へ連れて行ってくれた、林さんのお母さんの笑顔が思い浮かぶ。ゆりが家のお金を持ち出して遊んでいると知ると、どう思うだろう。板谷さんのお母さんは？ 見守ってくれている酒屋さんのおじちゃん？ 子ども会の子どもたちは？

このままではいけない。

奈央のことを林さんに話した。2人で考えたが、林さんも奈央を怖いと言っている。どうすることもできない。でも、このままだとお金がなくなっていってしまう。2年生になってクラスが離れてからも、板谷さんは水曜日に6組を覗いてお弁当を手渡してくれる。そのたびに胸がちくりと痛む。板谷さんのお母さんは、ゆりがそんなことをしているなんて考えもしないだろう。作ってもらったお弁当を見ていると、その明るい色が自分には似合わないと感じる。今の自分には、こんな素敵なお弁当を食べさせてもらえる資格なんてない。

「お母さんに相談しよう」林さんが言った。

全部、話した。林さんのお母さんは、黙って聴いてくれていた。

「ゆりちゃん。おばちゃんに任せてくれる？ どうなっても、おばちゃんはゆりちゃんを悪いようにはしないから。一旦、家に帰り」

林さんのお母さんが真っ直ぐにゆりを見る目からは、強い力があふれていた。



家に帰ると電話が鳴った。ゆりは急いで出た。

「星が丘中学校の木下です。3組の林さんから電話をもらってかけています」

いつもの弾むような担任の声ではなく、静かな低い声にどきんとした。

「お母さんに代わってもらえますか」

電話の受話器を夏子に渡した。もうだめだ。何もかもどうにもできない。悪いのは私で、とんでもないことをたくさんしてしまった。私は屋根の業者さんよりひどい、ずるい人間だ。

夏子が電話で話している5分ほどの長さが、1日のように感じられた。電話を切った夏子はゆりのいる玄関まで静かに歩いてきた。

「今まで、勝手にお金、使ってたの？」

そうなの、ごめんなさい、そう言いたいのに言葉が出ない。その代わりに、自分でも驚くような言葉が出る。

「……知らん」

玄関に立つ夏子の目を見るができない。その場から逃げ出したくなる。ゆりは、靴を履き、夏子の横を通り抜けて外に出ようとした。

その瞬間、頬に光が走った。「ぶたれたんだ」と気づくまで、少し間があった。

夏子を見る。血走った夏子の目とゆりの目が合った。大きく見開かれた目に吸い込まれそうになる。「しっかりしなさい、そう言われているような気がする。

「あなたがしっかりしないでどうするの、

夏子の目はそう言っている。

涙がじわりと目のふちに迫る。

お母ちゃんも私に関心がなかったわけじゃない。叱りたくても、今は病気で難しいだけなのかもしれない。

その後夏子は、奈央の家に電話を入れた。奈央はお母さんと一緒に謝りに来た。これまでの出来事を簡単に話し、今後、そんなことはしないとお互いが約束をした。その後も奈央がゆりの家に寄ることはあったが、お金を要求することは一切なかった。

「嫌やったら、言ってよ」

そういう風に言われることが増えた。謝りに来た出来事についても気にしていない様子だった。私が勝手に奈央ちゃんを怖がって、はっきり嫌だと言わないから勘違いをさせてしまったんだ。結局は自分が生み出した出来事だったんだ。

ゆりは、家のお金を使ってしまったことが気になっていた。夏子とは話ができるようになってきたが、働くのはまだまだ難しそうだった。

日本の法律では15歳になり中学を卒業した後なら働くことができると本に書いてあった。でも新聞配達は、学校が必要だと認めた場合に15歳未満であっても働くことができると聞いたような記憶があった。母親と2人暮らしでその母親が働けないのだから、必要だと認

めてもらうことはできそうだ。

ゆりは、駅前の新聞配達所の前に立っていた。ガラスの窓越しに、おじいさんが1人、チラシの束を運んでいるのが見える。5時を指す時計の下には、クリスマスリースが飾られている。日が落ちかけて辺りが薄暗くなり、年配の女性や男性がバイクで配達所へ戻ってきた。新聞配達員の人で若い人をあまり見かけない。中学生の自分が働きたいと言ったら何て言われるかな。でも、自分にできることはこれぐらいしかない。ゆりは深呼吸をした。ガラスの引き戸を右に引くとカラカラと音がした。その音に振り向いたおじいさんと目が合った。

「こんにちは、あのう……朝刊の新聞配達をさせてもらうことはできますか？」

おじいさんは、ゆりの頭からつま先までゆっくりと見た。

「お姉ちゃんは、何歳？」

「14歳です」

「えー、うーん、朝刊なあ……女の子は危なくてさせられへんなあ。お父さんやお母さんに訊いたの？ まず訊いてごらん」

今はまだ自分が働くことにも、お父さんやお母さんの許可がいる。女の子だと、危なくてさせられない仕事もあるのか。ゆりは、頭を下げて新聞配達所を後にした。

さっきまでの夕焼け空も、もう見えなくなっていた。息を吸い込むと、冬の冷たい空気が鼻の奥をツンとさす。通りかかった家の窓からカレーの匂いと笑い声が漂ってきた。ゆりは、夏子の待つ家に向かって歩き出した。

※この物語は実際の体験と、それを探究する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。